

レンズを通して

連載「十二月」

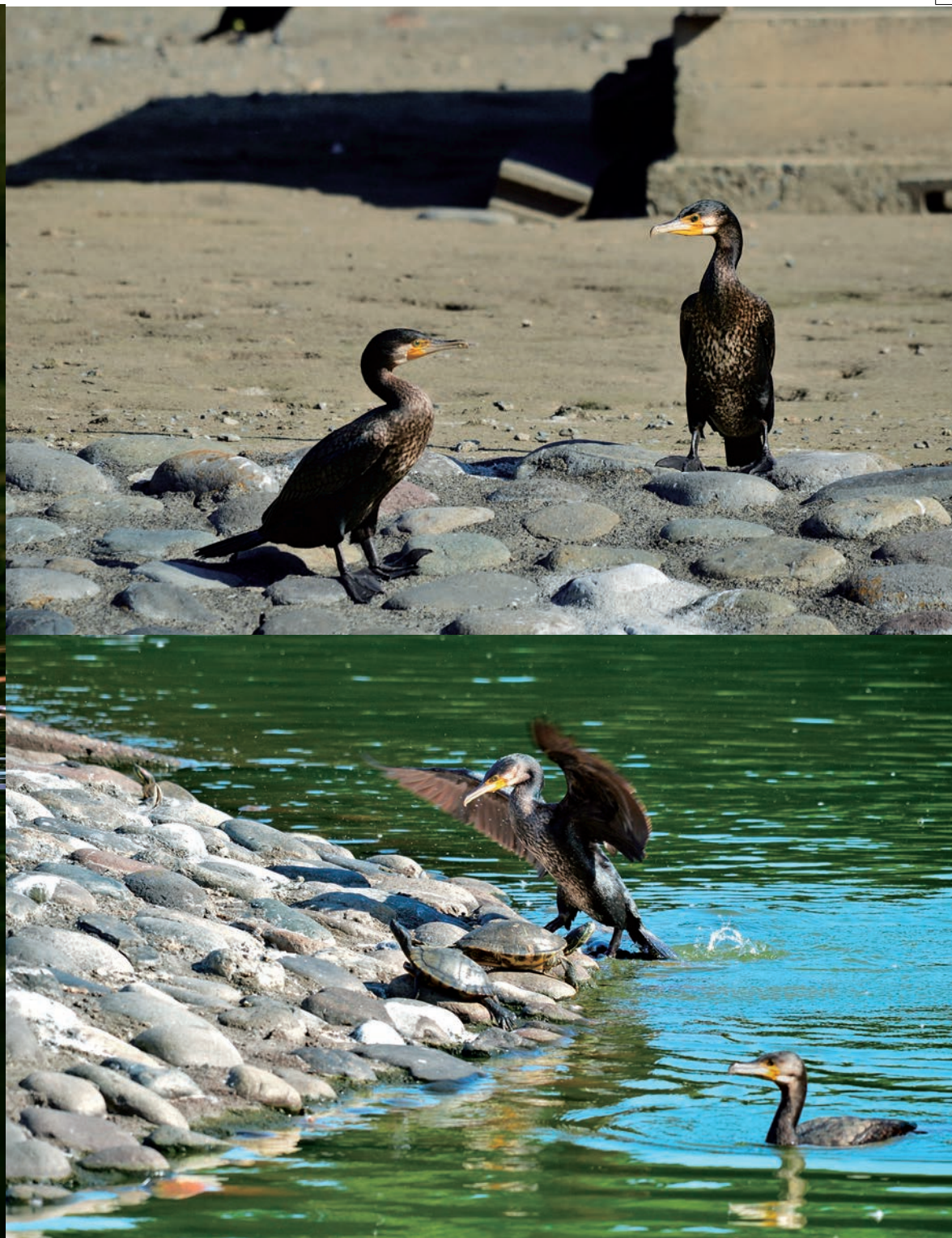
写真・文 高円宮妃久子殿下



アフリカコビトウ

ウ科 全長55cm

サハラ砂漠以南のアフリカ大陸に分布。ウの仲間では小型で白い眉斑が特徴。主に内陸の池や湿地でティラピアなどの魚を餌にして生活するが、海岸のマングローブ林などにも姿を見せる。ウが翼を広げるのは、羽を乾かすためという。



鵜の目

写真文 高田宮妃久子

私が最初に鵜と出会ったのは14歳ごろ、イギリスです。英名「Cormorant」の語源が「Corvus Marinus」海のカラス」と聞き、とても賢くなったような気がしました。ところが、和名では一文字で「ウ(鵜)」です。見つけた時は「あ、ウだっ」となるので、なんだか気の毒に思えました。文章中に一文字で「ウ」と書くのは読みにくいので、今回は「鵜」と書くことにいたします。

世界には鵜の仲間が約40種類いるのですが、英国では川で釣りを楽しむ人々にとっては迷惑な鳥です。鵜の撥水性のない羽毛は水中での抵抗が少なく、長く深く潜るのに適しています。その鵜が潜って次から次へと魚を捕ってしまうため、魚が減っているとのこと。せっかく魚を養殖し、放流しても、鵜が増えるだけで解決策にならないようです。

その名人芸を利用するのが、中国や日本などアジアの伝統的な鵜飼という漁法です。鵜は口にした魚を噛まずに丸呑みするので、魚の体に傷がつかず、旨みも落ちないそうです。全国教か所で見られますが、そのうち長良川の御料鵜飼いは宮内庁式部職の鵜匠によって行われます。「鵜飼い」という名称では、魚を捕る方に焦点を当ててではなく、飼っている方に当てているところがとても面白いと思います。

前述した通り、鵜は口にした魚は噛まずに呑み込むため、言葉の真偽をよく考えないでそのまま相手の言葉を信じ込んでしまうことを「鵜呑みにする」とは感じません。

といいます。野生の鵜を観察していると、びっくりするくらい大きな魚を呑み込んでしまいます。また、鵜や鷹が獲物をねらうときの鋭い目つきから「鵜の目鷹の目」という表現もあり、「ちよっとしたことも見落とすまいと熱心に探す様子や目つき」をいいます。往々にして欠点や欠陥を探すときに使われるので、いい印象はありません。「鵜呑みにする」は間の抜けたイメージ、「鵜の目鷹の目」は嫌味で鋭いイメージ。どちらにしても好ましいキャラクターとは感じません。

しかし、鵜をよく観察すると羽に光沢のあるなかなか魅力的な鳥。最初のページの南アフリカで出会った鵜は目の色がとてもきれいな赤。残りの3枚は日本にいるカワウで、こちらは目の色が澄んだ緑。人と話すときも目を見て話す印象が変わることがありますが、噂を「鵜呑み」にしたり「鵜の目鷹の目」で粗探しをすることは、自分が好かれないキャラクターになってしまいます。誰に対しても見かけだけでなく、目をじっくりと見て判断する努力を怠ってはいけないうつくづく思います。

カワウ

ウ科 全長82㎝

水辺にすみ、魚が主食。樹上に集団で営巣する。右側の写真2枚は宮内庁の鴨場、左の1枚は赤坂御用地内で撮影。世界中に広く分布し、日本では本州、四国、九州で繁殖する。1971年には繁殖地が3か所まで減少したが、河川の水質が良くなったことで、現在は個体数が15万羽以上に。2007年、営業木を枯らすことや餌とする川魚の減少が問題視され狩猟鳥に指定された。人々と鳥の共生は大切であり、難しい。